新型コロナウイルスとの戦い

◎クーロンヌとりで

店としての真価が問われている中で戦っていきたい

予防策を徹底し、入場制限も

茨城県を中心に複数のベーカリーを展開するクーロンヌジャポンは、新型コロナウイルスへの対応策を自社HPやフェイスブックで広く公表している。

茨城県取手市のベーカリー「クーロンヌとりで」の外観（上）と田島浩太社長（右）

4月3日の発表では、しばらくの間、営業時間の短縮を実施し、本店である「クーロンヌとりで」をはじめほとんどの店舗で午後5時を閉店時刻とした。夜間の外出自粛を促す流れに従った格好だ。

また、営業時の対策としては、従業員は全員マスクを着用し、出社時の体調チェックも強化。少しでも熱があれば業務を控えるよう促している。

さらに、店内もしくは店頭の手で触れやすい部分の定期的なアルコール除菌も実施。試食もしばらく休むことにし、「気になる商品がございましたら試食をお切りしますので遠慮なくお声かけください」と周知するだけにとどめた。

さらに混雑時には、店内への入場制限も実施している。ピーク時でも店内に4、5人の列ができる位に留めるようにし、残りは外で並んでもらうようにした。

「密度が高い閉ざされた空間になることだけは避けなければなりません。換気にも気をつけなければなりませんね」（田島浩太社長）

売り場の商品に関してはなるべく個別包装するようにしているが、フランスパンなどは風味が損なわれるためそれができない。

セルフサービスのため不安もあり、客に対しても、入り口での手指の消毒やマスクの着用をできるだけして入店してもらうよう注意喚起をしている。客から直接意見を聞く目的でHP上に設置している「お叱りウェブ」ではこれまで2件ほど、全ての商品を個別包装することを求める声があった。

マスクや消毒液の在庫に関しては、業務用の備品を発注している卸業者から定期的に仕入れているほか、個人的に買い抑えたものが本社にまだ残っているので、しばらくは不足しないのではとみている。

従業員の行動管理に関しても気を配っているが、2月頃からフランスへ旅行に行き、3月に入ってから帰国したパート従業員がいたので帰国日から20日間位自宅待機で休んでもらった。

売上自体は、駅ビル内の店舗は減少しているが、路面店は好調で伸びている。休校措置で巣ごもり需要が大きく伸びたためではないかとみている。

「それにしても、こうした状況だからこそ店としての真価が問われていくような気がします」（田島社長）

これまで地域で培ってきた客との信頼関係の強さが試されているとも言えるが、こうした逆境の中でも引き続き店を支持してもらうためにできる事をしていかなくてはならないと田島社長は考えている。

また社内的には、大勢集まっての会議は中止となったが、「ZOOM」アプリを使用してテレビ会議や研修を行うようになり、逆に生産的になった側面もあるという。

「今回の事は社会的には、多くの犠牲者が出て苦しく悲しい出来事ですが、それでも今までにない経験をする事でベーカリーとしては成長しているので、なんとか乗り越える力をつけていきたいですね」（田島社長）。